

福中香澄（兵庫県宝塚市）

タイトル「私の中の神様へ」

私は絵本が好きだった。特にファンタジーがお気に入り、いつか私も勇者サマになりたいと思っていた。『ももたろう』から『エルマーの竜』まで人を助けるという行為に、私は強く惹かれた。しかし、現実には暴れ者の鬼も動物にこき使われる竜もいなかった。その上私は臆病で内気な子供だったのだ。あしたもいちにちしあわせにくれますように。布団の中で毎晩目に見えない誰かに祈るのが私の習慣となっていた。夢は美しい空想に過ぎないのだ。

だが、小学校二年生の夏、そんな私の幻想は海の中で壊れてしまった。貝を拾っていたはずが突然、周りの景色が一瞬で消え去った。気付くと塩辛い水の中できくるくる回っていた。顔が水面の方に向いたのか、たまにきらきらした陽の光が目飛び込んだ。水が喉に流れ込んでくる。ああ、私は溺れているんだ。そう悟ると不思議と落ち着いた。私は海底を歩くことにした。塩水が目痛かったが、派手なビーチパラソルが徐徐に見えてきた。もう少し、もう少しだ。

そのときだった。すごい力で、私は沖の方へ引っ張られた。どうやら一緒に流されていたらしい、妹の小さな手が私の水着にしっかりしがみついている。髪をつかまれ、足が海底から離れた。波に押され、砂浜の喧噪が遠くなっていく。水中なのに妹の泣き声が聞こえる気がした。死を、初めて意識した。ふと、私の身体に巻きついた妹の細い四肢が見えた。一人なら助かるかも…。思い切り妹を振りほどいた。そのとき自分の夢が足元の砂のように崩れ落ちたのを感じた。

今年、16回目の夏が来た。あれから私は海に行っていない。あのとき結局妹は放してくれなかった。私は必死でもがいて二人ともなんとか助かった。私はあの海で現実を真正面から突き付けられたのだ。人を助けるには自分が強くなくてはならない。私は強くなれるだろうか。クーラーの冷気と家族の寝息に満たされた寝室で、私は今日も心中で祈る。神様、きっとみんな生きていけますように。